

C・A・ローガンとH・W・マイヤース

— 賀川豊彦を巡る宣教師達 —

深 田 未 来 生

一九六〇年四月二三日、七十二才の極めて色彩豊かな戦いの一生を終えた賀川豊彦は、日本キリスト教史のみならず日本の近代史そのものにユニークな足跡を残している。死後二三年を経た現在、賀川の客観的・史的分析和評価がせまられているといえよう。一九八二年東京に完成した賀川豊彦記念松沢資料館には、すでに賀川 の原稿や蔵書など四万点近くが集められ、さらに分散している貴重な資料の収集が進められている。一九八八年の賀川生誕百年を目標に、賀川像を新たに見直そうという動きの拠点となるべきものがこの資料館である。

賀川の如く、日本社会において多岐にわたる活動をした存在はもちろんキリスト教界にはいないが、その枠を越えて、明治以後の日本の歴史の中にもいなかったといえよう。今日においてすら、極めて意外な所で賀川の名を聞き、その影響力を耳にすると、死後二三年においても賀川研究は不十分であり、的確な評価が待たれていることを思うのである。賀川の死に近い一九六〇年一月に、国際キリスト教大学の武田清子教授は「賀川豊彦論」の中で、賀川の初期の労働運動活動を観察し、「日本のキリスト教会においても、『ああ賀川さんか』と割合に軽くあしらわれている感なきにしもあらずである」と、日本社会全般の賀川評を指摘している。賀川現存中の言葉とはいえ、武田のいささ

か直観的觀察は的をえていたといえよう。

現時点においても賀川を少なからず「軽くあしらう」傾向が、特にキリスト教界にないとはいえない。興味深いのは、同じ国際キリスト教大学の古屋安雄教授が見るごとく、かえてキリスト教界の外においての賀川評価の方が、キリスト教界内のものより高いとすら言えるのである。⁽²⁾どちらにしても、賀川については、すでに伝説化 (legendary) された話が定着しているものもあり、彼と密接な関係にあった人びとがまだある程度生存中で、一種の「使徒的」役割を果たしているために、かえて客観的分析、研究が困難であるともいえよう。しかし、また、そのことは現段階において不足しがちなデータを調達する可能性が残されているということでもある。

賀川の改心

賀川豊彦は賀川純一、萱生かめの次男として一八八八年七月一二日神戸に生まれた。その父を四歳にして、母を五歳にして、失った彼は、自らを「野に育った」と言うごとく、伝統的「家族」といった揺籃よちばんがなく、その少年時代を送っている。その体験を賀川は「淫蕩なる周囲」という表現で綴っている。⁽³⁾幼い賀川は姉、栄と共に徳島の本家に引き取られていく。そして主として祖母と義理の母の管轄のもとに育つのである。義理の祖母せいは「叱ることを専門のような」人であり、義母みちは自らが正妻であり、豊彦は純一の妾の子であるという事実を心理的に乗り越えることができない人であった。横山春一はみちを「病弱な教養の足りない正妻」と描写しているが、この評価は何に基づいているのか。賀川の生母かめが「気品のある清楚な美人で、珍しい程の教養とすぐれた才能をもった」⁽⁴⁾ことを強調するためなのか、この点は明確ではない。⁽⁵⁾

少年賀川は満四歳で牛屋島の第二堀江尋常小学校に入学しているが、加えて九歳の時に、近所の禪寺へ漢学を学びに通うようになり、そこに自分の家では感じられない清らかな空気を見出したという。手続き上の間違いから一年早く小学校に入学した賀川は学友に「妾の子」とからかわれたり、自分の、また親戚の家にあふれる「淫文学」の本に道徳的退廃を感じたり、なかなか出来ない友達のことと孤独に陥ったりして育っていく。そして彼は心の空白を吉野川流域の自然の豊かさの中で満たそうとしたのである。それにもかかわらず、「あの美しい吉野川の澄み切った青い水も、人の心を澄ますことは出来なかった」と賀川に言わしめた彼の環境は、少年に重くのしかかっていたのである。

一九〇〇年、十二歳の賀川は徳島中学に入学し、一年間寄宿舎生活を送る。田舎を離れ、都会に移った彼には自然が与える慰めすらなく、孤独感と悲しい心の重さは消えぬどころか日々増す様に見える、時には絶望感に陥ったりしている。賀川はその時代を回想して「私は早くから悲しみの子であった」と言う⁽⁶⁾。

賀川がキリスト教に接したのは徳島中学二年生の時、英語教師片山正吉が主宰する片山塾に移ってからである。賀川はキリスト者であった片山には特筆すべき感化を受けなかったようだが、少なくとも片山塾にいたことにより、英語への興味もあって教会と接触するようになった。ここにローガンとマイヤース宣教師との出会いがあり、賀川に宗教的改心が起るのであった。

C・A・ローガン (Charles A. Logan) と H・W・マイヤース (Harry W. Myers)

徳島中学校二年在学中、賀川は従兄の新居格と通町にあった日本基督教会で開かれていた週一回の英語による聖書

研究に出席するようになった。賀川十四歳の一月のことであったようだ。初段階における賀川の反応は、あまり気乗りしないようなものであったが、宣教師チャールスA・ローガンによって毎回プリントして渡されるキリスト伝の概略には何らかの興味は持ったようである。この聖書研究会への出席は長続きしなかった。しかし、ローガンが毎火曜日の晩、「創世記」の講義をするようになり、それに出席するようになったのをきっかけに、彼はローガンに対して急速に親しみを感じるようになった。ここから賀川はローガンの妻パティの兄ハリー W・マイヤースと、マイヤースの妻グレースとの出会いを体験し、人生の画期的転換へと歩み出すのである。

ローガン・人と働き

ここで二組の宣教師に焦点をあてることによって、賀川の信仰的出発点を見極めることが可能になると思われる。資料は必ずしも豊富ではなく、原資料になりうる宣教師の年間報告書や、個人的書簡の入手が極めて困難であるという難関にぶつかるのである。しかしながら、これらの宣教師に直接出会った体験者は今だに彼等のイメージを鮮明に記憶しており、そのイメージは共通して有能かつ人間味に満ち、極めて暖かいものである。しかしながら、このイメージはあくまでイメージに留まっているといえるのは、特にこの二人とその家族についてはあまり多くは書き記されておらず、また先にも述べたごとく、資料も多くはないのである。

賀川研究家の横山春一は、今日少なからず古典的になった「賀川豊彦伝」の一部をさいて「ローガン博士とマヤース博士」と題する数ページで賀川とキリスト教との出会いの媒介になった宣教師達を紹介している。この他、マイヤースについては、賀川の同労者黒田四郎の回想が、中央神学校在学中、直接マイヤースと接触した体験をも踏まえて貴

重な資料であり、極めて興味深い。黒田のマイヤース像は大体においてローガンを伴って描かれているとはいえ、主体はマイヤースである。ローガンとマイヤースは、結婚を通して兄弟関係にあったのみならず、その宣教活動の初期においては生活を共にしていたのであり、密接な関係にあった。賀川のキリスト教との係わりもローガンが突破口であり、マイヤースが養ったという一種のチームとの出会いを通じてであった。まさに一人が種を蒔き、今一人が水をやるといった方式である。

チャールズ・A・ローガンは一八七四年一月一日、アメリカ、ケンタッキー州シェルビービルに生まれた。父はジョージ、母はジョセフィンといい、製粉工場を経営する家庭であった。「古い家柄で新教徒だったらしい」という見方もあるが、一九世紀半ばのケンタッキーで、古い家柄というのは何を意味したのか、推測しがたい。アメリカの社会的観点から言うならば、ケンタッキーは南部であり、ローガンは南部の文化、教養を背景とし、南部長老教会での生活の中で信仰を養われてゆくのであった。

一八九三年にセンター大学を卒業したローガンは、そのままジャクソン市のジャクソン コレジェート スクール（後にリーズカレッジ）で三年間教鞭をとっている。神学教育はケンタッキーのルイビル神学大学とプリンストン神学校で受け、一八九九年に卒業となっている所をみると、両方あわせて三年間の基礎的教育を受けたと見てよからう。卒業と同時に、西レキシントン中会において按手札を受け、内地宣教師（ホーム・ミッシヨンパスター）としてジャクソンで三年間伝道の任についている。その一月二二日にバージニア州レキシントン出身のパティ・ブレイン・マイヤースと結婚したのである。そのパティの弟ハリー・マイヤースはローガンと同年齢であるが、すでに一八九七年に宣教師として日本に着任していたのであるから、ローガンとパティの結婚式には立ち会っていなかったと考

えられる。ローガン夫妻は、ジャクソンからウィルモアに移って短期間牧会にあたるが、一九〇二年南部長老派教会宣教師として日本に派遣され、一月二日、三九年間に渉る日本伝道の第一歩を踏み出している。二十八歳の時である。在日三九年間中、実に三五年間が徳島での活動と生活であった。

徳島では、すでにマイヤース夫妻が二年余に渉り伝道を続けていた。言うならば兄夫婦としてのローガン達は援軍であったのである。彼等は徳島市寺島本町の宣教師館に住み、日本基督教会徳島教会を根拠として広く伝道と宣教の任にあたり、ローガンはマイヤース達が神戸に移った後も、四国伝道に集中したのであった。「彼ほど親しまれた宣教師はなく、彼の住居付近は『ローガン』小路と呼ばれたほどで、徳島のキリスト教はローガンと同義語となり、精神的にも、文化的にも、市民に与えた影響は少なくなかった」という評価には重みがある。

ローガンが妻パティを急性肺炎で失ったのは一九二八年一月二二日の事である。五十四歳であったローガンにとって大きな損失であったであろう。彼は後にパティと同じバージニア州出身のローラ・ブラウンと再婚している

一九三七年、ローガンは東京に移るが、二年後には再び四国に戻り、丸亀に活動の中心を据える。そして一九四一年三月六日、悪化する日米関係の中、一一〇名の宣教師達と共に龍田丸でアメリカに帰国したのである。当時六十六歳であった。第二次世界大戦中のローガンの動向は掴み得ないが、戦後賀川の招きに応じて再び来日し、ローラ夫人及び娘エレン共々日本各地を巡回伝道した体験は大きな慰めであり、また喜びであったに違いない。彼は高齢にも係わらず、テネシー州ナッシュビルで牧会にあたっていたが、一九五五年六月三日、八十歳で世を去り、故郷ケンタッキー州シエルビービルに葬られたのである。ここに見るように、ローガンは徹して伝統的伝道形態に打ち込んだ宣教師であった。

ローガンの三九年におよぶ日本伝道、より正確には徳島伝道の評価分析はエピソード的断片を繋ぎあわせることによって、その一部を成す事が出来ると思われる。一般に宣教師の働きの評価の作業は、困難な要素をいくつか持つのであるが不可能ではない。そのための重要な資料の一つは宣教師達の多くに課せられている宣教師団本部への年次報告である。しかしながら、これ等の報告は入手が極めて困難であるために、あまり用いられず、結局同労者や友人による随筆的短文を通して全体像に類したものを掴む場合が多い。ローガンやマイヤースの場合もそうであるが、資料的にはまだローガンの方が多少なりとも存在するといえよう。

ローガンについては、岡博による小冊子『ローガン先生の人と信仰』があり、一九八〇年に徳島キリスト教センターにより再版されている。⁽¹⁾ 岡博は元、県立城南高等学校の教師であった人であるが、彼の一文はローガンの人物像を見るのに有益である。この冊子にはローガンによって入信し、大道伝道所の開拓にあたった古角権平の子息古角勝の短文も含まれている。

ローガンは南部人^{サザナ}であった。彼はアメリカの南部から日本の南部とも考えられる四国に移り住み、晩年アメリカ南部に戻って、そこに葬られている。彼には南部人らしい大らかさと暖かさがあつた。それは義弟マイヤースのものとはいささか異つたものであつたようだが、相通ずるものでもあつた。彼には燃えるような情熱的一面があり、時には同労者をたじろがせたようであるが、多くの場合、それは驚くほどのエネルギーとなり、アメリカ帰国後の実りを含めて百に至る教会の設立を可能にしたのであつた。葬儀における説教と考えられるコッグスウェルの一文には、日本で九五の教会の設立を成したと記されている。⁽²⁾ 太平洋戦争勃発直前、帰国したローガンは六十六歳であつたが、それ以後もバージニア、ケンタッキー、そしてテネシー州に新教会を組織したことはローガンの伝道的情熱と行動力が

際立っていたことを示している。

賀川のキリスト教との出会いについては、マイヤース像解明の中で取り上げることとするが、賀川と宣教師との接触は、まずこのローガンとであった。徳島で伝道を開始したのは、先に来日していたマイヤースであったが、賀川が参加したのはローガンの英語による聖書研究会であった。マイヤースもすでに聖書研究会を開いていたかどうかは明らかではない。マイヤースは後に、本町の自宅で聖書研究を始めており、少年賀川も参加するようになっていた。横山は賀川が参加したのは、毎週一回通町の日本基督教会でローガンが講義していたキリスト伝のクラスであったと報告している。¹³しかし、賀川の出席は数回で終わっている。ところが、その後、ローガンが指導していた「創世記」研究のクラスに賀川は出るようになった。横山はローガンを描写し、「柔和な輝いた顔、気品のある話しぶり、詩のような言葉、美しい発音などが豊彦の心を捕えた」と記している。¹⁴この描写は賀川自身の記憶に根差していると見てよからう。

賀川が接したローガンは、「普通の社会では見ることでできない程に本当に温かいクリスチャンの愛」¹⁵の所有者であった。横山は賀川自身の言葉を引用している。「神の人を見た者は幸いである。私はローガン先生に於て極めて美しい、そして静かな神の使いを見た。私に、もしもどんな生活が幸福かと問う人があるなら、ローガン先生のような生活が一番幸福だと答えるであらう。ローガン先生は、全霊、全生、全身を日本のために捧げてくれた人である。私はローガン先生のようにになりたい。¹⁶」、詩人賀川の表現にしてもかなりの讃辞である。先にもふれた如く、このローガンを賀川は戦後一九五一年後妻であるローラ・モリソン・ブラウン（一九三七年生れ）と、二人の間に生れたエレン共々日本に招き、伝道旅行をも共にしている。この体験はローガンにとって喜びに堪えないものであったようである。

岡の記録は、五か月間の滞在中、講演回数二〇〇回、聴衆三五、三三〇人と記している。⁽¹⁷⁾

ローガンに接した人々にとって、彼は徹底したエバンジェリスト（伝道者）として写っただけではない。彼は詩人であり、平和主義者であり、希望^{ホープ・イミテイション}的（あるいは樂觀的）ユーモアの人でもあった。有名な話は彼の GILLULOA（ギルロア）であり、それは単に God is love. Let us love one another.（神は愛である。私達は互いに愛し合おう）の柱文字を並べたものであるが、これを用いてローガンはどこでも簡單明瞭なメッセージを語ったのである。そして彼のインパクトを受けたのは、当然賀川だけではなかった。その賀川は、一九二一年、新川で若き日を思い起して次のように書いている。

そして最初会ったイエスの弟子も、私に徹底するような、イエスの生活をみせてくれなかった。それで、私は十五の時まで、イエスの大きな愛を知ることが出来なかった。

然し、ローガン先生の英語の聖書研究会に出るようになって、ルカ伝の山上の垂訓を暗誦して、私の心の眼は、もう一度世界を見直した。

私は何故、私の周囲が頹廢して居るかがすぐわかった。それは「神」が無かったからであった。偶像の統治の闇があまりに暗いものであった。そして私はその闇を破る勇気がなかった。然し私に米國宣教師の導きと愛が加わるとともに私の胸は躍った。今でも、ローガン先生と、マヤス先生は、私の親のように、私はまた彼等の心のように、いつ如何なる時でも、愛しいつくしんでくれるが私は、彼等を通じて、イエスを見た。そしてイエスの道がよくわかって来た。⁽¹⁸⁾

マイヤース・人と働き

賀川のキリスト教入信を巡る過程には必ずローガンとマイヤースの名前が浮かぶものの、その信仰の養育初段階は、明確にマイヤースとその妻の一人舞台である。賀川もキリスト教との出会いにおいて接したアメリカ人宣教師に

触れる時は、ほとんどローガンとマイヤースを一對にして語ってはいらぬもの、「彼等を通じてイエスを見た」という表現は、厳密にはマイヤース夫妻を指すと考へてもよからう。このことは決してローガンを過小評価する事ではない。賀川のキリスト教との接触は、先にも触れた如く、これ等のアメリカ人宣教師との出会いが初めてではなかった。しかしながら、ローガンの集會に出席し、彼を知ることによって、彼はまさに目から鱗が落ちるような宗教体験の糸口を見出したのである。この場合、当然ローガンが「創世記」について何を語ったかとも重要であるが、それ以上に、賀川はローガンという人格から新鮮なインパクトを受けたことを認めざるを得ない。十五歳の少年賀川をして「ローガン先生のようにになりたい」と思わしめたことは尋常なことではない。賀川を精神的に啓蒙し、燃えさせたのはローガンであった。信仰の種をまいたローガンには極めて優れた「水まき」がいた。これが義弟にあたるマイヤースである。

ハリー・ホワイト・マイヤースは一八七四年五月二〇日オランダ系の家に生まれた。バージニア州レキシントンでの出来事であった。レキシントンは美しいシャナンドーの谷がある平和な町であった。町には南部では著名であったワシントン・アンド・リー大学が存在した。父親ヘンリー・H・マイヤースは金物商であり、長老教会の長老であり、妻メリー・エラ・ネルソン・マイヤースは婦人宣教会の会長を務めるなど、その家族は深い宗教性に富んでいた。聖書は信仰と生活実践の基本として読まれ、繰り返し学び尽くされ、行動に移すことが強調された。レキシントンを訪ねた海外宣教師達は大体マイヤース邸にて持て成しを受けたようである。ハリーは七歳の時、本を読みながらアフリカか中国で働く召命を感じたのであった。マイヤース家では信仰そのものが生活であり、次週の教会学校の教材は月曜日から家庭内において研究課題であったとローガンは記している。当然ローガンの情報源は彼の妻パティ・

ブレイン・マイヤースであったであろう。マイヤース夫妻には五人の子供があったが、パティが長女であった。すなわち、後のミセス・ローガンである。ローガンは当時のレキシントンの若き女性達が、いかに魅力的であり、会話において豊かであり、彼女達に喜ばれる最高の方法は教会に誘うことであったと、ユーモアたっぷりにエピソードを記している。²⁰⁾

ハリー・マイヤースはレキシントンのワシントン・アンド・リー大学を十八歳で卒業し、一年後マスターの学位を得ている。彼は優れた記憶力を持ち、幼い時から家庭において童謡や童話、あるいはゲームを次から次へと披露し、家族の人々をすらすら驚かしたという。²¹⁾ ルイビル神学校を卒業したマイヤースは、一八九七年五月接手を受け、同年二月アメリカ南長老教会派遣宣教師として来日した。その直前、一月二十九日にミズーリ州レキシントンの長老教会でグレース・フィールドと結婚式を挙げている。

ハリーの出身地のレキシントンと同名のミズーリ州の町は、南北戦争において幾つかの戦闘の中心になった歴史があり、ハリーの町よりは幾らか大きかったようである。ラファイエット郡の郡都でもあり、豊かな農村地帯の中心であった。ハリーとグレースはまさに新婚旅行に日本へ旅立ったのであった。

日本に着任したマイヤース夫妻は南長老派教会の活動的中心地であった徳島を中心に岡崎、豊橋、そして神戸と一九四二年六月の強制送還まで、実に四五年間、日本を自らの「場」とし尽したのである。

マイヤース達の徳島定住の日付は定かではない。一八九五年一月二十五日には日本に到着しているのであり、ローガン達が一九〇二年に徳島に入った時、すでにマイヤースは宣教活動に打ち込んでいたのであるから、その五年間の中に位置付ける資料が必要である。

マイヤース一家の神戸への移住の日付も明確ではない。神戸神学校の設立にマイヤースは深く関わっていたわけ
で、黒田は「賀川が明治学院の予科二年に進んだ時、マイヤース博士は徳島を去って、南長老派宣教師団の働き地で
ある豊橋、岡崎地区の責任者として転任された」と記している⁽²²⁾ところを見ると、一九〇六年と考えられる。そして、
その一年後に、神戸神学校教授に就任したことを考えると、神戸への移住は一九〇七年と見てよからう。

神戸神学校の歴史は一九七一年出版の「中央神学校の回想」にその足取りを見る事が出来る⁽²³⁾。一九〇三年、明治学
院神学部における植村正久と宣教師教授S・P・フルトンの間に起った神学テキストを中心にした論争を機に、フル
トンは神戸に南長老派教会独自の神学校の設置を手がけ、植村は翌年（一九〇四年）東京神学校を創立している。

黒田は「神戸神学校は、初めから神学的立場をはっきりと、純正カルビン主義に立てていたのである」と記してい
る。この場合の純正の内容は問われてもよからうが、簡単に言えば、極めてオーソドックスなものであり、当時台頭
していた新神学や合理主義的思考を廃して聖書を神の言とし、イエスを神の至上の啓示とするカルビニズムに徹しよ
うとした姿勢であったといえよう。このあたりは設立の柱であり、校長を務めたフルトンの神学思考を辿ると理解で
きる。

マイヤースは新設された神戸神学校の教授を務めつつ、さまざまな形で伝道活動に参加し、多くの人々を応援した
ようである。賀川一人をとっても、特定のニードが高まり、彼が困難に直面するとマイヤースの名前が出てくること
ろをみると、マイヤースの働き場は神学校キャンパスに限定されていなかったことが分る。後にマイヤースは、神戸
ユニオン教会の牧師も兼ね、一九四一年一月八日、太平洋戦争勃発の日、彼はその職にあり、また、神戸神学校
（当時、中央神学校と改名）の運営責任をも負っていたのであった。この日の逮捕、さらに裁判、判決から堺刑務所

での独房生活についての記録はほとんどない。これらのことは同志社大学人文科学研究所編の『特高資料による戦時下のキリスト教運動』においてすら触れられていないのは不思議といえよう。

マイヤースは軍事機密の漏洩罪、すなわちスパイ容疑で懲役一年の有罪判決を受け、投獄されたことは、中央神学校在学時からマイヤース家と親しかった岡田稔牧師の記憶に残っている。岡田は、マイヤースが天文学に長けており、そのために使用していた大型の天体望遠鏡と、彼が好んで用いた短波放送受信可能なラジオの二つが、スパイ容疑を裏付けたのであろうと言う。マイヤースはしばしば重慶やマニラからの放送を聞いていたようである。

マイヤースの投獄は多くの人々にショックを与えたが、病身の妻グレースの悲しみようは全く手のつけようもないほどであった。と岡田は記している。²⁶⁾ 囚人の着物を着せられ、一八〇日間、独房生活を続けたマイヤースは、拷問を受け、くり返し銃殺刑の可能性で脅された、と言う。このあたりの記録は、当然、彼が友人に語ったものである。が、スウィーツが書き残している。苛酷な条件下に置かれたマイヤースであったが、興奮が治まると、没収された眼鏡や本なしの生活に徐々に慣れ、彼本来の信仰の喜びと明るい人格性がよみ返ってきた。日曜日、朝一一時ごとに、縦二メートル四〇、横一メートル五〇の独房の中に立って、マイヤースは頭の中で通常の礼拝形式をくり返し、説教もした、と語っている。そして「そういう説教の中には相当、力強いものがあり、私の説教のベストの内に数えてもよかるう」とユーモアたっぷりに述べている。²⁸⁾

独房生活が耐え難くなると、詩篇一〇三をくり返し頭の中に描いていたマイヤースは、一九四二年六月六日、突然、所長に呼び出され釈放を告げられた。神戸の小さなホテルに軟禁状態にされた彼には、妻との面会が毎日三〇分許されたが、同月六日に三百人の「敵性外国人」と共に、交換船浅間丸にて愛する日本を離れたのであった。東アフ

リカの港でグリプシヨルム号に乗り換えたマイヤース達は、八月二十五日、ニューヨークに入港して、長い旅を終えたのである。

マイヤースについては、賀川もその著作の中で何度も触れ、賀川はマイヤースを「私の信仰の父」と呼んでいる。『死線を越えて』の中でのウィリアムス博士はマイヤースのことである。神戸神学校時代のマイヤースについて触れている人も多く、また記憶に鮮明に残っている人も何人かは存命中である。黒田の記録にはマイヤースがしばしば登場する。どの場合にも、マイヤースは明るく、暖かく、信仰厚い。彼と同様、豊かな人柄の妻、グレースとの間に形成された家庭は常に人々に開かれたオアシスであったことを告げるのである。黒田のマイヤース像は明快である。「博士は極めて明るい人で、ユーモアを解する所があり、一緒にいる人を楽しくさせた。また、頭が頗るよく、生物学、地質学、天文学、美学などに精通して博学であった。そして人を強烈に愛し、人を救わんとする伝道心に燃えていた。その上、聖書を明快に秩序正しく解説し、信仰の真髄を説く迫力があつた。声量も豊かで、人に迫ってくる熱情に燃えた雄弁家であつた」⁽²⁷⁾。そして黒田は、賀川の雄弁の型においても、マイヤースの影響が大きかつたと見ている。賀川は、路傍伝道も、マイヤースの真似であつたと黒田は記しているが、これは当然であろう。明治学院在籍中の賀川は、マイヤースの後について自転車で訪問伝道に出かけたこともあり、キリスト教のスタイルは主としてマイヤースから吸収したのであつた。また、蒲郡で結核療養中の賀川を訪ねたが、二日間も席の上で共に寝てくれたことは有名であるし、マイヤースの家庭では、賀川がいつ現われても食事ができるように、ナプキンとフォークをテーブルの上に置き、彼の席が常に設けてあつた。このことを賀川は感動を持って綴っているし、しばしば語つたといわれる。⁽²⁸⁾ 幼き日の賀川とマイヤース夫妻の出会いや生活についてのローガンの記述は、現実的色彩に富んでいる。少年賀川

が病弱であり、多感であり、鋭い靈性を持ち、早熟であったことは黒田も記しているが、その気性の激しさや突飛性は、賀川をして誰にでも容易に愛される少年としなかつたであろうと思われる。ローガンが描くマイヤースの秀^{ひび}でた徳性は忍耐力である。ローガンは、自分と賀川との関わりにおいて、時折、忍耐力が持続しなかつたことを告白しながら、マイヤースが驚異的に忍耐強かつたのは、一つに賀川とマイヤースの性格に共通点がいくつかあつたからである。二人とも強い知的好奇心の所有者であり、記憶力において優れ、その読書力には、いささか超人的なものがあつた。しかし、共通点ばかりではなかつたであらう。賀川の生れ持つた性格がどうであつたかは別として、十五歳前後の賀川には安定した価値感があつたわけではなく、また彼が明るいパーソナリティであつたとも思えない。突然、菜食主義を主張したりする突飛な面があつたり、「イエスの御告げ」を理由に突如、明治学院から徳島に帰つたりする人物だったのであるから、ローガンやマイヤーも困惑したようである。忍耐力においては、マイヤースの妻グレースも夫に劣らなかつたとローガンは言う。賀川に背広を与えると、次に現れた時にはすぐに道端の男にそれを与えてしまつており、汚ない着物をまどつてゐる。グレースは声一つ高めずに、別の背広をまた与えたと言う。こういったエピソードを綴るローガンの随筆は、マイヤース達に対する敬愛と親愛の念に満ちてゐる。²⁹

マイヤースが日本に残したものは、人格的インパクト、彼の信仰の深さと熱情、そして徹底した神への服従の姿勢だけではなかつた。神戸神学校、そして中央神学校とマイヤースは神学教育に深く関わり、接した学生に大きな影響を与えたのである。彼が担当した科目は、新約ギリシヤ語、教会史、音楽、天文学におよび、彼の博学を示している。神戸神学校の設立にあつてマイヤースと姉パティは兄弟ネルソンの死に伴つて彼らに与えられた財産を寄付してゐたのであつた。そして、神学校で、マイヤースの薫陶を受けた日本人、朝鮮人学生は二〇〇人を超えている。マ

イヤースの家には貧しい学生、特に朝鮮人学生が絶えず世話になっていた、と一九四一年卒業の今村正夫（現日本基督教会京都教会牧師）は著者に語った。神戸ユニオン教会牧師を務めていた期間、若い外国人青年達はしばしば、マイヤース達の家庭に安らぎを得、さまざまな面で面倒を見てもらったと語るのは、戦前から神戸のパルモア学院で奉仕したジョン・B・カーブ夫人（現在カルフォルニア州クレアモント在住）である。

マイヤースの神学的方法論と傾向、彼の日本理解、特に平和論等については、さらに資料の収集と研究が必要である。さらに先にも触れた開戦時における彼の逮捕と投獄について明確にしなくてはならない課題はいくつもある。マイヤースが例外的に優れた宣教師であったといえる根拠はないにせよ、マイヤース夫妻が、賀川を含めて、日本のキリスト教界に残したインパクトはより正確かつ的確な評価を受けるべきである、と著者は考えている。この事は、日本における宣教師運動とその功罪、さらに人物像の評価と展開的分析に関連するものとなろう。しかし、その中でもローガンとマイヤースの存在は際立ったドラマを示していることを疑わないものである。

- (1) 武田清子「賀川豊彦論・その社会思想における人間(上)『思想の科学』第一三号、一九六〇年一月、五五ページ。 二二年、一三五ページ。
- (2) 古屋安雄「賀川豊彦」、『その目は炎のごとく』、ICU 学生会編、一九六三年、九四ページ。
- (3) 賀川豊彦「神と贖罪愛への感激」〔賀川豊彦全集〕第三卷、三八二ページ。
- (4) 横山春一「賀川豊彦伝」、一九五〇年、五ページ。
- (5) 前同。
- (6) 賀川「イエスの宗教とその真理」、(全集第一巻)、一九二二年、一三五ページ。
- (7) 横山春一「賀川豊彦伝」、一九五〇年、一五一―二三ページ。
- (8) 黒田四郎「人間賀川豊彦」、一九七〇年、三四―四〇ページ。
- (9) 黒田四郎「私の賀川豊彦研究」、一九八三年、一三四―一三六ページ。

- 黒田四郎「神戸神学校二十年の足跡」、『中央神学校の回想』、一九七一年、八七―九〇ページ。
- (9) 岸積「チャールズ・A・ローガン」、『徳島の百人』、徳島市民双書一、一九六八年、三九三ページ。
- (10) 前同、三九四ページ。
- (11) 徳島キリスト教センター(編)、『ローガン先生の人と信仰』、一九八〇年。
- (12) James A. Cozswell, *Rev. Charles Alexander Logan, D.D., 1874-1955*, source unknown, p. 26.
- (13) 横山、一五ページ。
- (14) 前同、一六ページ。
- (15) 黒田、『私の賀川豊彦研究』、一九八三年、二九二ページ。
- (16) 横山、一六ページ。
- (17) 岡、二三ページ。
- (18) 賀川、『イエスの宗教とその真理』(全集第一巻)、一三五―一三六ページ。
- (19) Charles A. Logan, *Friend of Kagawa: Harry White Myers, Student Volunteer Movement, 1942* p. 1.
- (20) Logan, p. 7.
- (21) Henry H. Sweets, *The Laid Hold on Life: The Story of Harry White Myers*, (date unknown), p. 4.
- (22) 黒田、『私の賀川豊彦研究』、一三七ページ。
- (23) 中央神学校史編集委員会『中央神学校の回想』、一九七一年。
- (24) 前同、八五ページ。
- (25) 前同、一四二ページ。
- (26) Sweets, p. 13.
- (27) 黒田、『私の賀川豊彦研究』、一三六ページ。
- (28) 賀川、『女性讃美と母性崇拜』(全集第七巻)、三四六ページ。
- 賀川、『身边雑記』(全集第二四巻)、一五一―一六ページ。
- (29) Logan, pp. 1-4.